二葉館 あれこれ Vol.17

レトロなストーブ

大広間のストーブ

文化のみち二葉館では、創建当時に貞奴と桃介が使用していた家財道具や日用品なども展示しています。今回はそのなかからストーブについてお話しします。

大広間と集会室の2か所にあるストーブは、レトロ感あふれた洋風のつくりをしています。時折お客様から、このストーブは電気なのか、それともガス仕様なのか、と聞かれることがあります。もともとこの邸宅は、桃介の電力事業を促進するための、最先端の電化住宅であったため、電気仕様とも考えられるのですが、こちらはガス仕様のストーブです（裏側にガス栓が確認できます）。

移築・復元する前の「二葉荘※」に残されていたこのガスストーブは、創建当時の大広間に電気とガスの2台のストーブが備えられていた、という証言があることから、大正時代に貞奴と桃介が使用していたものと考えられてきました。

果たしていつ頃の製品なのか―。この度、改めてガスメーカー等にて調査をしていただいたところ、大広間に展示されているストーブは昭和25年頃に販売され、集会室のストーブは、それよりも古い昭和8年頃のものだろう、ということが明らかになりました。どちらもその頃の米国ハンフレー社の国内メーカー模造生産品に類似している、ということです。両製品とも形状は同じように見えますが、細部に若干の違いがあるため製造年が異なるようです。大広間にあるストーブの側面には、英文の銘板「TOHO GAS CO.,LTD」がついているのですが、これは戦後の駐留軍などの外国人向けに販売することを考慮しているようで、戦後の商品と推定されます。

今回の結果により、どちらのストーブも大正時代に貞奴と桃介が使用していたのではなく、二人が名古屋を離れた大正15年以降に備えられた、ということが分かりました。二人が名古屋を離れて東京へ転居した後は、貞奴と養子縁組をした川上広三・富司夫妻がこの屋敷に住んでいました。そして昭和12年には、当時の大同製鋼株式会社取締役・川崎舎恒三が建物を購入し、昭和32年に大同製鋼株式会社に所有権が移転しました。

このストーブは、白い棒状のスケルトン（耐火粘土製）を赤熱させて室内を暖めていました。現在はガスストーブとしての役目を終え、レトロで愛らしい展示品として多くの来館者の目を楽しませています。

集会室のストーブ

※二葉荘…株式会社大同ライフサービスの保養施設。平成12年に名古屋市へ建物を寄贈。

IRODORI いろどり

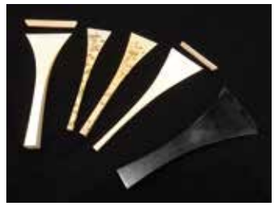
二葉館にある
貞奴ゆかりの品の中から
今回は三味線と撥について
紹介します。

展示室2に貞奴愛用の三味線が展示してあります。

普段は床の間に置かれているので、細部まではなかなかご覧いただけないかと思いますが、美術品としても大変美しく、天神（糸巻部分）や胴回りには、繊細な蒔絵がほどこされています。特に胴の部分には雅な絵がぐるりとひとつながりに描かれています。

また、当館所蔵品には、三味線と共に寄贈された撥も複数あり、なかには蒔絵のほどこされた美しいものもあります。

胴にほどこされた蒔絵


象牙、蒔絵、べっ甲の撥

桜の蒔絵の撥

毎年2月8日は、開館記念日ふたばの日として、皆様をお迎えしております。

今回は、この撥も期間限定で公開（2月8日～15日）する予定ですのでお楽しみに。

※蒔絵とは、漆で絵や文様を描き、金や銀など金属粉を「蒔く」ことで模様を浮き上がらせる技法。日本の伝統工芸を代表する技術。

天神裏側の蒔絵、糸巻の細工

文化のぶらりさんぽみち ⑰

鍋屋町通り

文化のみち二葉館から南西へ徒歩10分、東片端南の交差点を左に入ると、「鍋屋町通り」があります。鍋屋町通りは、古くは中山道へと続く歴史ある善光寺街道の一部で、飲食店や専門店など様々なお店が並ぶ通りでもあります。今回は、鍋屋町通りの歴史と、散歩しながら訪れることのできる老舗をご紹介します。

慶長16（1611）年、清須越しにより、清須から名古屋への都市移転がありました。この時、清須の鍋屋町から多くの鍋職人が現在の地へ移り住んだことから、「鍋屋町」という地名がつけられました。当時の鍋職人は鋳物師と呼ばれ、尾張藩から特権を得て鋳物の製造・販売を行っていました。鍋屋町は、のちに泉二丁目三丁目に編入されてしまいましたが、現在も通りの名前として残っています。

調理器具専門店「鍋屋」は、青い壁に大きな鍋の絵の外観が印象的なお店です。永禄2（1559）年に創業し、清須越しで鍋屋町に移転した後も鋳物師頭を代々務めた水野家が、現在は金物屋を営んでいます。お店の前には「尾張藩鋳物師頭水野太郎左衛門宅跡」の札が立てられています。

洋菓子・喫茶ボンボン

鍋屋

鍋屋の北向かいにある「洋菓子・喫茶ボンボン」は、昭和24（1949）年創業のお店です。ショーケースには、色とりどりの可愛らしい洋菓子が並び、純喫茶の昭和レトロな内装からは、お店の歴史を感じることができます。

さらに東に進んだところにある「澤井コーヒー本店」は、昭和23（1948）年創業のコーヒー卸業のお店です。老舗の風格ある店内には、昭和30年代から使用している大きな焙煎機が目を惹き、お店の中に広がるコーヒーの香りで癒されます。

今回ご紹介したお店はごく一部ですが、この他にも、鍋屋町通りには新旧さまざまなお店が並んでいます。通りを歩くことで、鍋屋町の歴史を知り、この土地で親しまれているお店を知ることもできます。

文化のみち二葉館を訪れた際には、鍋屋町通りにもぜひ足を延ばし、散策してみてはいかがでしょうか。

澤井コーヒー本店

from Archives 書庫棟から

茨木のり子と永瀬清子

『見えない配達夫』（飯塚書店）
『あけがたにくる人よ』（思潮社）

わたしが一番きれいだったとき
街々はがらがら崩れていって
とんでもないところから
青空なんかが見えたりした／（略）
（詩集『見えない配達夫』
「わたしが一番きれいだった時」より）

詩人・茨木のり子といえば、近年では「わたしが一番きれいだったとき」や「自分の感受性くらい」などの作品を国語の教科書で習った方も多いのではないでしょうか。

茨木のり子は、大正15年に大阪で生まれました。昭和7年、6歳の時に現在の愛知県西尾市に転居。その後、幡豆郡吉田町（現・西尾市吉良町）に転居し、16歳で愛知県西尾高等女学校（現・愛知県立西尾高等学校）を卒業しました。進学のため、太平洋戦争が本格化する中で上京しますが、その時の空襲体験は、後年の作品にも影響を残しました。

卒業後、文筆活動を始めると、詩人・川崎洋と同人詩誌「櫂」を創刊しました。「櫂」には才能豊かな若い詩人が集まり〝全員が花形詩人の同人誌〟とも評されたそうです。

「櫂」創刊後の昭和30年には、第1詩集『対話』を刊行。その後も、『見えない配達夫』『倚りかからず』など数々の詩集を刊行し、日本の現代詩を牽引する姿は〝現代詩の長女〟と呼ばれました。

一方、茨木のり子に先駆けて詩壇で活躍し、女性詩人の草分けとなったのが、〝現代詩の母〟永瀬清子です。

清子は、明治39年に岡山県赤磐郡（現・赤磐市）に生まれました。父の転勤に伴い、金沢で過ごした後、大正11年、16歳で名古屋市東区に転居しました。短歌や詩に憧れていた清子は、『上田敏詩集』を読んで詩人になることを決意し、当時開校したばかりの愛知県第一高等女学校高等科（現・愛知県立明和高等学校）に入学しました。

詩誌への投稿によって詩人・佐藤惣之助という師を得た清子は、女学校を卒業した後、同人詩誌を中心に活躍し、昭和5年には、第1詩集『グレンデルの母親』を刊行しました。戦時中は岡山に戻って農業に従事しましたが、その間も詩作を続け、戦後すぐに詩集を刊行しています。その後も、岡山県熊山町の婦人会会長として海外視察をしたり、岡山県詩人協会の会長を務めたり、晩年には代表作となる詩集『あけがたにくる人よ』を刊行するなど、精力的に活動しました。

まだ女性詩人が珍しかった時代に、日本現代詩そのものを牽引した永瀬清子と茨木のり子。2月からの展示では、この二人の詩人についてご紹介します。ぜひ、楽しみにしてください。